

「アリス」から「アリツイニャ」へ

百々 佑利子

(1) 「アリツイニャ」

ここに二冊の本がある。ALICE'S ADVENTURES IN WONDERLAND (一八六五) および ALITJI IN DREAMLAND=ALITJINYA NGURA TJUKURMAN-KUNTJALA (一九九二) である。前者は日本にも愛読者の多い『ふしぎの国のアリス』(以下「アリス」)の原著である。

後者は、「ドリームランドのアリツイニャ」(以下「アリツイニャ」)であり、「アリス」をオーストラリア先住民アボリジニーズの一言語であるピッチャンチャカラ語に翻訳した版である。アボリジニーズは石器文化を発達させ、文字はもたなかった。本書に印刷されている文字は、英語のアルファベットを借用したものである。

編集者の覚え書によればテキストは一九七四年に完成し、バイロン・シーウエルの挿絵をつけて出版されている。しかし白人の手になるアボリジナル風の挿絵であったため、*seems inappropriate to have artwork by a*

non-Aboriginal to illustrate the Pitjantjatjara text. と、アンバランスな感触がまわりついていた。それから一八年後に、アボリジナル画家を迎え挿絵を新たにして刊行された。

ほぼA四版を横にし、絵本の体裁をとった本書は、副題に「An Aboriginal version of LEWIS CARROLL'S ALICE'S ADVENTURES IN WONDERLAND」とある。クレディットの隣頁が、目次である。向かって左に KAMPA、右に CONTENTS とあるように、目次から本文まで、ピッチャンチャカラ語と英語が併記されている。但し英語のテキストのほうは原著のそれではなく、ピッチャンチャカラ語テキストの忠実な英訳である。タイトルも同じで、ALITJI IN DREAMLAND は英語のタイトル、ALITJINYA NGURA TJUKURMAN-KUNTJALA はピッチャンチャカラ語のタイトルということになる。英文テキストの内容は、ピッチャンチャカラ語で語られる物語の完訳である。その内容は小文

で章毎に紹介する。

「アリツイニャ」は一〇章にわかれており、Glossaryを除いた本文は一〇〇頁あり、そのうちおよそ三分の一が挿絵に割かれている。「アリツイニャ」のテキストは、「アリス」のテキストのおよそ三分の一という抄訳あるいは翻案である。

小文では、「アリツイニャ」の成立について述べたのち、アボリジナル版アリスと原著「アリス」を、章を追って比較したい。誕生以来一三〇年強を経た「アリス」が、いまはマルチカルチュラリズムの先進国であるかつての英植民地オーストラリアの先住民文化に、そして北半球とはまるで様相を異にする豪大陸の風土に如何に移植されているかをみるためである。とくに「アリス」文学の生命である、「言語の遊び」、ノンセンスの面白さが如何に理解され生かされているかを考察しなければならぬ。

(2) 「アリツイニャ」の誕生

「アリツイニャ」の産みの親ともいべき「アリス」の成立はよく知られている。児童文学者の間では運命の時のように思われている一八六二年七月四日の「in the golden afternoon」に、オクスフォード大学クライストチャーチ・カレッジの数学の教師チャールズ・ラトウィッ

ジ・ドジスン(一八三二—一八九八)は、同カレッジの学寮長リデル氏の愛娘三人、ドジスンいわく「cruel Three!」を、チームズ川の舟あそびにつれだした。舟の上で三人は、ドジスン先生にお話をせがむ。そのときに、「There will be nonsense in it!」と予言者のようにいったのが、中の娘にして物語の主人公となる当時一〇歳のアリス・リデルだった。アリスは、自分が活躍するノンセンス・テイルズをいたく気に入ったに違いない。即興に語られた物語を文学で綴るように、ドジスンをせかした。ドジスンは物語を書き下ろし、苦心して自身の挿絵までつけた手作りの本を、アリスに啓上した。ALICE'S ADVENTURES UNDER GROUND (一八六四)である。この原本自体が長い旅路を経た末に世に出るのだが、それは我々にはもう既知の旅である。

「地底のアリス」を少女アリスにプレゼントした一年後、世界中で読まれてきたALICE'S ADVENTURES IN WONDERLANDが、ドジスンあらため筆名ルイス・キャロル (Lewis Carroll) 作、サー・ジョン・テニエル (John Tenniel) の挿絵で刊行された。作者が死亡し一九〇七年に版權が消滅すると、「アリス」は、抄訳版をはじめ様々の版で出版されるようになった。画家の想像力を大いに刺激するアリスの物語とあって、挿絵を手がけた画家も数多い。編集者がALICE IN MANY

TONGUES (ウィスコンシン大学出版局、一九六四)のリストで調べたところによると、「アリツイニャ」の初版(一九七四)は、四四番目の言語による翻訳になる。

さて「アリツイニャ」である。「アリス」という英名は、ピッチャンチャチャラ語で発音されると、英文タイトルからわかるように、「アリツイ」となる(英名が日本風に発音された場合と同程度の「変化」である)。「アリツイニャ」は、アリツイにもっとも近いピッチャンチャチャラ語風の女の子の名前である。小文は、ピッチャンチャチャラ語からの英訳を基にするので、「アリツイニャ」でなく「アリツイ」としなければいけないのだが、アボリジナルの読者が読む物語という意味をこめて「アリツイニャ」版と表示しておく。

翻訳を手がけたのは、ナンシー・シェパード(Nancy Sheppard)であり、一九九二年版の挿絵画家は、ドナ・レズリー(Donna Leslie)である。初版の挿絵画家シーウェルについては、ルイス・キャロルのコレクターである白人画家、アボリジナル絵画の研究者であったとしたデータがない。

翻訳者ナンシー・シェパードは、赤い砂が支配するオーストラリア中部、アリス・スプリングズに近いアーナベラで、一九五五年から十年強、アボリジナルの子どもたちが通う学校に勤めた。その間にピッチャンチャチャラ

部族の人々と交流し、その言語を学び、部族の領域の自然や動植物に親しんだ。ピッチャンチャチャラ部族は、現在の行政区画を借用すれば、南オーストラリア州西部から、西オーストラリアおよび北部準州にまたがる広大な地域をテリトリーとして栄えていた。創世神話や伝説をあまた伝承してきた文学性豊かな人々である。シェパードも伝承に接する機会に恵まれ、何話かを英語に訳したり、逆に英語の教材をもとにピッチャンチャチャラ語の教材を部族の子どもたちのために作ったりした。教職から退いてのちは南オーストラリア州の都会アデレードに移り住んで、アデレード大学と協力して、アボリジニーズの文化復興、とりわけ子どもたちのためにストーリーテリングの場を復活させるために尽力している。

挿絵を描いたドナ・レズリーは三〇代初めの若い画家であり、ガミレロイ部族に属し、ニュー・サウス・ウェールズ州西部に生まれて育った。メルボルンで美術と教育学を学び、個展を何回も開いた実力の持ち主であり、大地と人間の結びつきを絵筆で蘇らせたとの定評を得ている。カラフルな挿絵を紹介できないのは残念だが、ピッチャンチャチャラ部族のテリトリーの大半を占める砂漠の赤土が絵本の基調になっている。少女アリツイニャは裸だが、タスマニア島など雪の降るとくに寒い地域以外では、裸がアボリジナルの普通の姿だった。髪は黒く、

目鼻立ちもアボリジナルの少女のそれである。ピッチャンチャチャラ語のテキストとその英訳が最初に世に出たのは一九七四年であり、テキストは楽しみのもととしても教材としても使われ続けてきたが、ドナ・レズリィが挿絵を付けてはじめて、「アリツィニャ」はアボリジナルの子どもたちが楽しめる絵本として誕生した。

(3) 「アリツィニャ」の冒険

「アリス」に親しんだ読者なら、表紙をめくったときに、タイトル頁の装丁に逆さまにぶらさがったフルーツコウモリが登場するのを見て面食らうかもしれない。オーストラリア大陸に育つ子どもならば、人種を問わず、親近感を抱くだろう。果樹園の実りが豊かになるときまつて大群をなして飛びかい、ぎゃあぎゃあとうるさく鳴きたてる有袋類である。

二言語併記の目次の左側のクレディットの頁には、宇宙人というか、ばい菌を漫画仕立てにしたというか、ラッキョウ型の面をかぶった緑の生き物が三人、とぼけた顔をして並んでいる。両わきの二人は、槍をもっている。いにしえのアボリジナルの狩人が使った槍だ。しかし軽いタッチと線でユーモラスに描かれた緑の三人組は、ゆるやかな衣服の輪郭がドットでなぞられている以外、アボリジナル風の絵とはいえない。タイトル頁とクレディッ

ト頁を通過した読者は、ごく身近なオーストラリアの大地を舞台に、欧米のものともオーストラリアのものとも測りかねる、だがユーモアがふんだんに詰まっている物語が展開されるのだなと予感を抱くだろう。

その次の頁には、物語の前奏曲となる絵がある。一頁の中央をピンクの流れが横切る。そこに座る二人の、肌が褐色の少女たち。向かって左には、真っ白のカンガルーが、網袋と杖をもってはねている。前景は緑の草地、遠景はユーカリ樹がそびえる赤土の原野である。これから先は「アリツィニャ」版のストーリーを、章を追ってみていきたい。ピッチャンチャチャラ部族の子どもたちは、赤茶の囲みに入っているピッチャンチャチャラ語のテキストを偷しむだろうが、小文ではその横に印刷されている英訳を用いて比較をすすめる。

一章「Down the Hole」

「アリス」の章題は「Down the Rabbit-Hole」である。オーストラリアにはもともとウサギがいなかったのだ、ピッチャンチャチャラ語には、ウサギという言葉がない。訳者は章題から「ウサギ」をとり、アリツィニャは、白ウサギでなく、白カンガルーを追いかけて穴に飛び込むことになる。

退屈しているアリツィニャは「Oh dear, oh deary

me. 'I'm late.' といふつゝ走り過ぎる白カンガルを
追ふ 'never stopping to think how she would get
out again.' と、向こうみずにも穴に飛び込む。この筋
は忠実に原著に沿っている。異なるのは、小道具であり、
アリツィニヤの置かれた環境である。

アリツィニヤはつまらなそうな本を読んでいるお姉さ
んの側で退屈しているのではなく、えんえんと物語を語
るお姉さんの横にいて退屈している。アボリジナルは文
字をもたなかった。語りの場合は、伝説、歴史、民話を知
る図書館として、神聖ですらあった。子どもたちは、
「語る」修行を長年させられる。修行がアリツィニヤの
ようにまだ幼さを残しかつ活発な女の子にも面白いかど
うかは、また別の次元の問題である。

白ウサギの配役をもらった白カンガルは、扇や手袋
をもった白ウサギが waistcoat-pocket から watch を取
り出してアリスを驚かせるように、白い毛皮をまとい、
dilly-bag と digging-stick というアボリジナルの暮し
に欠かせない道具をもっていて、アリツィニヤを驚かせ
る。チョッキを着たウサギがいないのと同様、純白のカ
ンガルはいない。ディリーバッグは、草を編んだ袋で、
採集した食糧を入れるもの。掘り棒は、植物の根元の土
を緩めて根っなどを掘り上げる道具である。

「アリス」の愛読者がこの章で喜ぶ箇所、例の 'The

Antipathies に続くアリスの独り言の中にオーストラリ
アは登場する。地球を突き抜けて落ちてしまい、反対側
の（逆立ちをして歩いている）人たちに会ったときに、
is this New Zealand? Or Australia? と質問しても
いいのかしらと自問する場面である。ニュージーランド
やオーストラリアの読者は、ダウン・アンダーとか、逆
さまの国とか、ギャグめいた言い回しを自虐的に楽しむ
すべを心得ている。しかし差別が差別でなかった一九世
紀の英国の上流家庭の娘アリスに比べて、差別に苦しん
できた先住民の二〇世紀末に生きる娘は、逆さまに歩く
人々と同化しようとする。

"I must fall right through the earth soon, and
then I shall come to some other adomosphere.
I suppose I'll see a different sun, out beyond
this earth. And there might even be people—
people who walk upside-down, perhaps, in that
other-side place. How shall I speak to them?
Perhaps I'll be upside-down, too!"

アリツィニヤは、地球の反対側で逆立ちして歩く人々
に会ったら、私も逆立ちしてものを尋ねようと思うので
ある。

アリスが猫のダイナの餌を心配するあまり、子ネコと
コウモリの順序がごっちゃになってしまう場面で、アリ

ツイニャは、餌のほうを言い変えて、lizzard と gizzard を混乱して言い間違える。ここは原著通り cat と bat でもよかったのではないか。オーストラリアには野生の猫もコウモリも多数生息しているのだから。

一章のクライマックスは広間で身体が大きくなったり小さくなったりするアリスの受難である。地下広間のアイディアは、アポリジナルにとつてさほど珍しいものではない。アリス・スプリングズのあたりに、地上であれ地下であれ洞窟は沢山ある。アポリジナルが住居や避難所に利用していたらしく、岩壁画も残っている。ウサギをカンガルーに替えたのは、地上を勇壮に跳ねていくカンガルーしか知らない、突拍子もない変改のように思えるが、洞窟に描かれた壁画を見ればわかるように、洞穴カンガルーが生息していた。

アリツイニャが落ちたのは地下洞窟のひとつで、木の根っこを伝って登れば外界が垣間見られる。だが、開口部は、アリツイニャが外へ出られるほど大きくなかった。そのときアリツイニャは洞窟の中に置かれた自生のトマトを見つけて、それを食べる。すると身体がどんどん縮んでいく。いざ根っこを伝って登ろうとするが、身体が小さすぎて根っこにつかまることがすらできない。ところがまたまたヤムイモを見つけたので口に入れる。

「アリス」では、「わたしをおのみ」とか「わたしを

お食へ」という指示が現れる。見張られ命令され操られて行動するのは、不気味である。「アリツイニャ」版には、その不気味さがない。困ったときに適切な贈物が湧いてくるのは、安易すぎる。もっともアリツイニャが、受身の少女という設定では無論ない。「Now stop that. You're just a cry-baby.」と自分を叱りつける強さは継承している。日常の事の成行きは退屈だから、まあ変化があつていいかなと思うアリスほど、アリツイニャは積極的ではないが、*“...in this place so many strange things have happened that one expects them all the time.”*と我とわが身を納得させる程度には前向きである。

二章「The Pool of Tears」

この章では、三メートル近く身体が伸びてしまったアリスがだぶだぶ涙を流し、涙の池でネズミなど動物たちといっしょに泳ぐ話が綴られる。

アリスが途方に暮れて泣いているときに通りかかった白ウサギは、アリスに話しかけられてびっくりし、扇と手袋を落として逃げていく。「アリツイニャ」版で白カンガルーが落とすのは、ウーメラである。ウーメラは、うなり板とでも訳すのだろうか、板に人間の毛を編んだ紐が結びつけられていて、投げると、うわーんというよ

うな共鳴音を發する。ピッチャンチャチャはか、ウーメラが投げられて落ちた瞬間に生ずる変身の伝説を伝える部族は幾つかある。ウーメラを握ったまま、アリツィニャはどんどん小さくなっていく。アリツィニャがウーメラを拾って変身をとげるのは、アボリジナルの視点に立てば理にかなっている。

アリスが自信を喪失しかけて、四五の十二、四六の十三と、間違ったかけ算をする場面は、九九を習いたての小さい読者に人気がある。読者は自分が優位に立てるだけではなく、独りぼっちで見知らぬ土地にいながらなお自我を保とうとする強い少女が少々自分のレベルにおいてきたような、安堵感を得られるからだ。しかしかけ算のないアボリジナル文化には、九九は登場しない。「ロンドン」はパリの首都で、パリはローマの首都で…」の箇所は、次のように変えて語られる。

“Let me see, Itimpi is to the west and Wanikata to the south, while Wilu is among the trees and Uluru is on the creek. Oh, dear, I can't really remember.”

アリツィニャも混乱している。ウルルを忘れるとは。ウルルは、英語名をエアーズ・ロック、世界最大の一枚岩である。ウルルがクリーク（季節的に干上がる川）にかかっているはずがない。ウルルは、中央砂漠をテリト

リーとするアボリジナル部族にとって宗教的に神聖な地とされており、アボリジナル部族の成員ならばよほど精神に混乱をきたさないかぎり、ウルルの場所を忘れるはずがない。アリツィニャは、本当に気が動転していたのである。

そこへネズミが現れる。アリスは、フランス語の初等教科書にある文章「*Où est ma chatte?*」と口走ってしまふ。天敵である猫の名を聞いたネズミは震え出す。同じ場面で発するアリツィニャの不用意な言葉は、現代のオーストラリアの子どもたちでなければわからない。

“It (Hopping Mouse) doesn't speak English, so I'd better try Pitjantjatjara.” And she tried again: “Papa ya: Itji?” (This was the first sentence in her Pitjantjatjara lesson. It meant: “Where is the dog?”)

ピッチャンチャチャ部族に属する子どもでも、幼いときから自然にピッチャンチャチャ語を聞いて覚える子は多くない。古来の部族生活が崩壊したいま、先住民文化復興運動の恩恵を受けて、小学校であるいは中等教育であらためて母語を教わるのが現状である。その初等教科書（ナンシー・シェパードが作った教科書かもしれない）の冒頭にある文章の一つが、犬はどこですか？なのである。犬は、獐猛で嫌われものの山犬デインゴのこ

とだろ。ディンゴは氷河時代に浅いインドネシア海域を渡ってきたといわれる。ディンゴの人なつこきをアボリジナルの人々は知っているが、アリツイニャが、*he's a wonderful kangaroo catcher.*”というように、他の動物たちにとってディンゴは恐ろしい存在だ。ネズミが震え上がったのも無理はない。

三章「Getting Dry and the Long Tale」

コーカス・レースが、章題から抜けている。英国の政治用語であるコーカスにあたるピッチャンチャチャ語は無い。代わりに章題に使われた「身体を乾かすこと」は、もともとコーカス・レースの目的である。

三章では、岸に上がった動物たちとアリスが、身体を乾かすという目的は一つながら、歯車の合わないやり取りをする。ネズミのいう *“the driest thing I know.”* に続くのだらとした話は、ウィリアム征服王についての無味乾燥な（まるで歴史の教科書の一節のような）記述である。それが「アリツイニャ」版では次のようになる。

“I have something to say that will make all dry.
..In the very beginning we all had dry scaly
skin, like the lizard.”

“Ugh,” said the Port Lincoln Parrot with a

sniver.

「いちばんはじめのとき、わたしたちはみな…」は、キャンプ・ファイアを囲んだ語りの場における定型の出だしである。「いちばんはじめのとき」とは、「夢の時代」ドリームタイムを指す。「アリツイニャ」の英文タイトルにある「ドリームランド」は、創造神話中の先祖たちが夢を見ていた土地である。ドリームタイム（ピッチャンチャチャ語では、アルチャリンガ）にあつては、ものみなが人間だった。ところが様々の事件が起きて、ある人間は鳥になり、ある人間はカンガルーになり、ある人間は岩や鳥になった。変身に至る過程の行動が、ドリーミングである。ドリームタイムが終わった瞬間から、変身は永遠に不可能になった。アリスが夢から覚めたときと同じである。鳥になった人間は鳥のまま、カンガルーになった人間はカンガルーのまま、永遠に人間の姿をとり戻すことはできなくなった。しかし人間のままで残った人々は、足元に、樹上に、水中に、昔の仲間たちを見ることができし、自然界の諸々を慈しむことによって、仲間たちを慈しむことができるのである。「アリツイニャ」版に使われた懐かしい語り初めは、読者あるいは聞き手たちを、臨場感に満ちたドリームタイムの物語に誘いこむ効果を発揮する。

ネズミの話が終わっても、身体がちっとも乾かないと

不満をもらすアリスに、ドードー鳥は、コーカス・レー
スをしようと提案する。「アリツィニャ」版でも、固有
名詞を抜かした“a race in a circle”を、ドードー鳥が
提案する。

三章で読者の目をひくのは、ネズミの長い尻尾の形に
くねくねと書かれたネズミの身の上話だろう。「アリツィ
ニャ」版は、法廷や裁判の話が語られる「アリス」版で
なく、元本つまり「地底のアリス」のそれを採用してい
る。改変は「地底のアリス」の中で「マットの下にネズ
ミ」と語られているのを、「地面の下にネズミ」と言い
替えた部分だけである。この詩の内容は、オーストラリ
アのネズミの境遇にも違和感なくあてはまる。同じこと
は、二章のワニの詩についてもいえる。「アリツィニャ」
版に「アリス」からそのまま使用可能なものには、詩が
多い。

四章「The white Kangaroo sends in a Little Tinka」

ウサギについて家に入ったアリスの身体がまた大きく
なってしまう、腕をにゅつと窓から突きだす始末だ。外
からその腕を見た白ウサギは、あの腕邪魔つけどと、ト
カゲのビルを煙突から下ろし（ビルはアリスに蹴飛ばさ
れて吹き飛ぶ）、次に石をアリスに投げつける。石がお
菓子に変わったので、アリスはそれを食べて小さくなり、

外へ出てキノコの上にいるイモムシと出会う。

アリツィニャは、白カンガルーの住まいである樹皮と
草と枝の家にはまって出られなくなった。屋根から下ろ
されたのは、小さなティンカである。ティンカは、ピッ
チャンチャチャラ語で小トカゲを指す。ティンカはトカ
ゲのビルのように、アリツィニャの膝で蹴上げられ、死
にそうになる。四章の「アリツィニャ」版は、練瓦の家
が樹皮の差しかけ小屋になっただけで、「アリス」とほ
んど変わっていない。ただし最後にアリツィニャが見
るのは、キセルを吸っているイモムシではない。

‘...she gazed into a tree with mistletoe berries
in it, and there she saw a large witchety grub
chewing mingkulpa, oblivious of her presence.’

オーストラリア以外の土地で暮らす読者にとって、ウィ
チエティ・グラブは、何も意味しないだろう。これは蛾
の幼虫で、オーストラリアの土中や木のうろの中にいる。
大人の男性の手のひらの差渡しほどの長さの、クリーム
色をしたイモムシである。アポリジナルの重要なタンバ
ク源でもある。

枯れ木をとんとんと地面に叩きつけると、うろの中か
らぼろりと生きたイモムシがころげ落ちてくる。それを
焚火の残り火に埋める。しばらくしてから灰をかき分け
ると、表面のけば（毛）が焼け落ちてつるつるになった

イモムシが現れる。外側だけほんのり焦げている。これを食べるのである（私事になるが、アリス・スプリングズのアボリジナル・キャンプで、ウィッチェイ・クラブを賞味する機会があった。チーズのような味わいと聞いていたが、ちよつとぴりつとした香ばしさがあって、なかなか美味だった）。

四章から五章に移る前の挿絵を見ると、白くてふんわりふくらんだイモムシが描かれている。白い体のでっぺんに、白い眉毛に大きな目玉の顔が乗っている。顔の擬人化は少々安易で、おいしそうな感じが半減する。町住まいのアボリジナルが増え、画家もイモムシを食用とみなしていないのかもしれない。

「アリス」のイモムシは、テニエルが後ろ姿しか描いていないので、おいしそうかどうかは判らない。しかしテニエルもキャロルも、よだれを垂らしてイモムシを見つめる読者がいるとは夢にも思わなかっただろうから（知ったら、逆立ちして歩くよりもっと奇妙な風習だと思つたにちがいない）、どんな顔か判らなくてよいのである。

五章「Advice from a Witchety Grub」

身体が大きさがくるくる変わるので、自分が誰だかわからなくなつてしまつたと嘆くアリスに、イモムシは、

‘You are old, Father William’を暗唱するようにいう。アリスが長い詩（ウィリアムという固有名詞は使われていないが、この詩もほぼそのまま「アリツイニャ」版に登場する）を暗唱し終えると、イモムシとアリスは次のようなやり取りをする。

“That is not said right,” said the Caterpillar.

“Not quite right, I’m afraid,” said Alice, timidly.

“Some of the words have got altered.”

“It is wrong from beginning to end.” said the Caterpillar decidedly.

同じ箇所が「アリツイニャ」版では次のようになってゐる。

“That was all wrong,” said the Witchety Grub.

“Some of it was right,” said Alitji timidly.

“The whole thing was completely wrong,” said the Witchety Grub....

一日に何度も大きさが変わるアリスにしてみれば、このように答えざるを得ない。自信喪失しているのである。それに引き換えアリツイニャのはうは、おすおすながら合っているところだつてあるわよ、と言ひ返す強気の口調である。ぴしんと否定するイモムシの姿勢はどちらも同じだ。アボリジナルの伝承物語では、変身はお手のもの、あるいはどの話でも変身が登場人物たちの主たる

行動である。若者が驚に変身する、あるいは若い女が小島に変身してしまうその変わりようの激しさから思えば、サイズの変化など些細な出来事である。アリツイニヤの遠慮気味ではあれ自信に満ちた口調から、アポリジナルの女にふさわしいメンタリティーが伺われる。

キノコを食べたアリスは首が長くなって（自由にくねらせることもできて）、おまえさんは蛇だと、鳩にいわれる。アリツイニヤは、ミッスルトーの北側の枝と南側の枝を食べわけて伸びたり縮んだりを操作するが、やはり蛇のように首がくねくねと長くなり、鳩に蛇だと思われてしまう。鳩とアリツイニヤによる、私は誰？のやり取りは、アリスと鳩とのそれと同じで、キャロルの微妙な語り口がそのままに生かされている。

六章「Bandicoot and Itupa Root」

「アリス」では章の冒頭で、魚顔の召使が蛙顔の召使に、女王から公爵夫人への伝言を伝える。「アリツイニヤ」版では、それが次のようになる。

“The Witch Spirit has bade me send up a smoke signal to call the Spirit of the North Wind to a corroboree.”

The frog-faced man answered him: “The Spirit of the North Wind is called to a corroboree by

a smoke-signal the Witch Spirit has bade you send up.”

They both bent over to sit by the fire and their ochred curls became entangled.

召使という職業はアポリジナル社会にはないから、ただの男になっている。但し、外見は原著と同じである。女王は、ピッチャンチャチャラ語で、「クンカバ（魔女霊、とくに少女を悪意の対象にする）」に、公爵夫人は「ビリーチャニヤ（北風霊）」に変わっている。クローケー遊びの代わりであるコロボリーは、アポリジナル文化のなかでもっとも特長的な祭儀である。大きな火を焚いてその周りに集い、祭儀の目的にふさわしい踊りや歌が披露され、例えば成人式などの儀式が執り行われる。煙は合図ののろしであり、煙の高さや強さを調節して、兄弟部族を呼び集めたりする。赤土（オーカー）を塗った巻毛が絡み合うが、アポリジナル社会では、コロボリー開催など特別な行事の前に髪や身体に赤、白、黒などの粘土を塗ったり決められた意匠を腕や胸や腹に描く。アポリジナルの髪は、直毛あり巻毛あり、色も黒から薄茶まで多様である。金髪の赤ん坊もいる。成長するに従って、色が濃くなっていく。登場人物や集まりの名称は替えられているものの、言語遊びの愉快で滑稽な味わいはそのままである。

アリスは（アリツイニャも）家に入る。入ったところはキッチンで（炉辺で）、あたりに煙が立ちこめている。北風霊は赤ん坊に乳を飲ませ、料理女が（べつの女が）、スープを（イツニパ、臭いのきつい根菜を、ビリー缶の中で）煮ている。ビリー缶は、オーストラリアを代表する料理道具である。といっても大ぶりの空缶にすぎない。紅茶だけはどんな辺境の地にあっても飲まずにいられない英国系の開拓者たちが、焚火の上に渡した枝に針金の取っ手を引っかけて湯を沸かした。当然ながらアボリジナルの石器文化にはなかったものだが、いまでは、キャンプを張るアボリジナルもビリー缶を使って湯を沸かす。

アリスとチェシャ猫は、「アリス」の中でとりわけ愛されている組合せだが、「アリツイニャ」版ではただのにやつく猫になっていて、固有名詞が欠けたぶんインパクトが弱い。ただし歯をむき出したオーストラリアの山猫の絵には、凄みがある。「アリス」で赤ん坊が変身した子豚は、オーストラリア固有のげっ歯類であるバンディクートに変わっている。バンディクートは、ネズミより小さく、草食だが獐猛ですばしこい。子豚と赤ん坊にはサイズも含め類似性がないが、バンディクートとアボリジナルの赤ん坊を例え一瞬であれ見間違うとは考えにくい。豚は、一八世紀に開拓者が連れ込むまではオーストラリアにはいなかった。

アリスとチェシャ猫の問答は、アリツイニャと山猫の問答になる。人間界の常識を揺さぶるふしぎの国（夢の国）の論理の展開は同じである。ところが山猫は「Hatter」と「March Hare」ではなく、「Horse」と「Stockman」のいる方角を教える。ここで「アリツイニャ」は、アボリジナルが占有していた頃のオーストラリアの物語から、後任者が入り込んだのちの物語になってしまう。馬は、開拓者が一八世紀に持ち込んだ生き物であり、ストックマン（牧童、白人もアボリジナルもいた）は、白人の牧場に属する人間である。

馬や牧童は、アボリジナルのドリーミングからの覚醒を象徴している。もっとも覚醒は、すでにビリー缶の登場から示唆されている。だが「アリツイニャ」は、ドリームランドを離れてしまつてよいのだろうか。いっぽう「アリス」は帽子屋と三月ウサギを媒介にしていよいよ伝承の世界に、不思議を超えて不条理の世界に深入りしていき、最後にクローケー・グラウンドと法廷というクワイマックスの二場面に突入するのである。「アリツイニャ」は明らかに逆の方向へ動いている。その成行きを、次章で見えていきたい。

十章「Billy Tea and Damper」

章題にあるビリー缶は、オーストラリアの茶会（椅子やテーブルがなくても）の主役である。ダンパーは、イネ科の植物の種を石で叩いて粉にし水を混ぜてこね、焼石の上で焼いたものの英語名である。アポリジナルも、同じような食べ物（ナルクンチャ）を作った。眠りネズミは、コアラに変えられている。コアラは、催眠性のあるユーカリの葉を食べてうつらうつらするのが身上だから、うつつけの役柄である。

アリスがブドウ酒を（アリツィニャが、肉片を）勧められ、何も無いじゃないの、失礼ねと抗議したところ、招待されないのに来るおまえのほう失礼なやつだとやりこめられる。このくだりはそのままである。三月ウサギが時計を紅茶に浸す場面は、道具立てが、原著と「アリツィニャ」ではまったく異なる。

The Horse picked up the Stockman's rifle and said, "Really, this is useless. Why did you tell me to put salt in it?"

Rather embarrassed, the Stockman answered,

"It was good salt."

"Maybe," the Horse grumbled, "but it has ashes in it. Why did you push in the salt with a burnt stick?"

Gloomily the Stockman took the rifle and, pouring tea down the barrel, said: "It really was the best salt."

「アリス」で、時計の働きについての人間の常識（いまでは何年かまでを時計は示してくれる！）が述べられる場面で、アリツィニャは濡れてしまったライフルは役立たないという。ひねりのない応答ではある。

"That rifle wouldn't shoot, it would only spear things."

「時」問答は、会話から会話へ流れていくアリスの物語をひときわ輝かせる。「時」ほど万人が共有するものはないのに、「時」の命題ほど人によって答えが異なるものはない。「時」の重要性に比して、「ライフル」の機能は些末である。しかしアポリジニズは銃によって全滅させられそうになったし、銃は伝統文化も破壊した。異人種間のコミュニケーションが全くなかった時代の、オーストラリア開拓初期のアポリジナルは、離れていても人の生命を瞬時に奪うことができる「銃」を、白人の「神」とみなしていた。その意味でいえば、この場面の馬と牧童とアリツィニャは、「神」の命題について問答をしていたともいえる。

「アリス」が時（と、時計）を一貫して追究するのに比して、「アリツィニャ」では、ライフルから太陽（チュ

チヌ、物語のはじめでアリツイニャが髪にさしていた、ヒナギクならぬ赤い実のチンツと音がかけてある」へと話の穂が継がれる。会話は一貫性を欠き、散漫になる。アリツイニャは、例によって（アリスのごとく）「みんなのいうことって、さっぱり意味がわからない」といい放つが、登場人物の多彩さと命題の神秘さゆえに紅茶の味わいも特別になるティー・パーティーが、なぜ神秘性を豊かに内蔵しているアポリジナルの伝承文化と結びつかなかったのか判断に苦しむ章である。

この章には、子どもたちがよく知っているきらきら星の替え歌が使われている。「アリツイニャ」では、オーストラリアの国民歌である「ウォルツィング・マテイルダ」の替え歌が使われる。「マテイルダ」の主人公は、渡り牧童である。羊泥棒（当時の私刑は、絞首刑）をしたあげく、殺されるよりはと大池に身を投げる。自由気ままな暮らしを命より愛する男の気迫がこもっていて、大人にも子どもにも愛唱されている。「マテイルダ」の渡り牧童は白人だが、牧場から羊を盗んで私刑されたアポリジナルは数えきれないほどだった。大地を気ままに歩きたいという「マテイルダ」の切ない願いは、アポリジナルこそよく分かちあえる。

ビリー缶から「マテイルダ」まで、読むほどに開拓時代のオーストラリア社会が顔を出してくる。「アリス」

が当時のウィクトリア社会を映しだしているのを受けて、「アリツイニャ」は同じ頃のオーストラリアを舞台にもってきたのだろうか。ピッチャンチャチャラ語の初等教科書も新しいオーストラリアの象徴である。訳者は、アポリジニーズのみが大陸を占有していた時代を、郷愁をもって振り返っているのではないようだ。ピッチャンチャチャラ語と英語の両方のテキストが併記されているのは、英語しか知らない現代のアポリジナルの子どもたち、あるいはアポリジナル文化に関心をもつ非アポリジナルの子どもたちを視野に入れているからだろう。異なる文化を背負った子どもたちがとりあえず共有しているのは、開拓時代のフォークロアである。アポリジナルの夢の時代に限定しなかったのは、共有伝承でもってオーストラリアの子どもたちの心をつけたい意図があったとの解釈も成り立つ。

八章「The Witch Spirit's Game」

冒頭で、トランプのカードが白バラを赤く塗り替えているところへ、アリスが来る。ハートの女王と王も来て、ハリネズミをフランミゴの槌で叩くクローケーが始まる。「アリツイニャ」版では、葉っぱの子どもたちが、赤土（オーカー）を花に振りかけている。魔女霊が主催するゲームは、ハリモグラ（エキドナ）をコウノトリの槌

で叩くというもの。人喰い霊を従える魔女霊を先導するのは、兵士ではなく、通過儀礼を経たばかりの大人の仲間に入れてもらう資格を得た若者たちである。挿絵の魔女霊は、真つ赤な髪に真つ赤な身体、貴重な赤土をふんだんに使える身分であることがわかる。

ゲームのやり方、首をちょんぎれとのべつわめく魔女霊、猫の出没など、この章は、トランプというユニークな道具立ては消えているものの、大きな変更はない。人間アーチとコウノトリの槌を握るアリツイニャの挿絵は、躍動感に溢れている。但しピンクの禿頭の人喰い霊（口はすごく大きい）はできのよくないSF漫画だし、魔女霊の絵には「女」らしさが全くない。もっともハートの女王のほうも、衣装をはいだら女には見えないだろう。

九章「The Kangarutle's Story」

原著のこの章の冒頭、つまり公爵婦人とアリスのちっとも譲りあおうとしない問答が、「アリツイニャ」版では順序が次のように変えられている。カットされた部分も多い。しかし少女のしっかりした気質は、そのまま保たれている。

“You are thinking so much that you have forgotten to speak.”

“I'm sorry,” Alitji said quickly. “It's a very

interesting game they are playing, isn't it?”
The Spirit of the North Wind rested her chin on Alitji's shoulder.

It was an uncomfortably sharp chin, but not wanting to be rude, Alitji said nothing.

Now the North Wind Spirit chided Alitji again.

“You are still thinking and saying nothing.”

“I have a right to think,” Alitji said sharply.

“Just as much right as Blue-tongued Lizards have to fly, or trees to wander—”

ニセ海亀を知らないアリスは、女王に連れられてグリフォンのもとへ行き、ニセ海亀に会う。アリツイニャは、エミューのもとへ連れられて行き、カンガラートルという空想上の動物に会う。カンガルーとタートルの合成語である。カンガラートルの身の上話は、Tortoiseとtaught usの言葉遊びから始まるが、その後は省略されて、いきなりChapter 10, The Lobster-Quadrilleのダンスの場面に飛んでしまう。

アポリジナル社会には制度化された教育機関はなかったが、教育の場はあった。男の子は狩猟を教わり、女の子は採集を教わった。他に神話、伝説などを暗記させる大事な時間がもたれた。この場面こそ、現代の子どもたちにも、アポリジナルの古来の教育現場を、ユーモアとシメー

クをキャロル風にふんだんに交えて描いてみせるべきではなかったかと思う。もっとも七章の項で述べたように、現代と未来に視点を置けば、こういう構成にならざるを得ないのだろう。

ニセ海亀とグリフォンは、アリスのまわりを廻りながらタラの歌を歌う。アリツイニヤが聞かせてもらうサンリとカンガラートルの歌の詩もまた、流暢でちょっと悲しくて美しい。水辺の葦の間に生息する生き物たちが並んで、滑るように優雅に水草を避けつつ泳ぐという、アポリジナルの言伝えが想起される。

ニセ海亀はスープを想像させるが、(カンガ)ルー・スープは、オーストラリアのごちそうの一つである。

十章「Aliji Awakes」

法廷の場面である。「アリツイニヤ」版では、アポリジナルにとって家庭でもあり裁きの場でもある焚火の脇で裁判が始まる。魔女霊と人喰い霊が焚火に近いところにおいて、動物たちがそれを囲み、周りの木々の枝には、カササギ、鷹、オウム、インコなどオーストラリア固有のあらゆる鳥が止まっている。白カンガルもいる。

「アリス」でどたばた調に活躍する無学な陪審員は残念ながらもいない。馬と牧童が入場する。牧童はバタつきパンならぬダンバーと、紅茶茶碗ならぬビリー缶をもって

いる。彼は死刑の脅しにうろたえて、ビリー缶をかじってしまふ。そのとき、アリツイニヤの身体がまた大きく伸び始め、コアラは窮屈に感じる。

“You have no right to grow here,” said the Koala.

“What nonsense,” said Aliji, more boldly.

“You are growing too, you know,”

“Yes, but I grow at a reasonable pace,” said the Koala.

牧童は、帽子屋が逃れたように、罰を逃れる。根菜を煮ていた女が尋問されたあと、白カンガルはアリツイニヤの名を叫ぶ。大きくなった少女は、動物たちをなぎ倒して立ち上がり、本件について何も知りませんという。人喰い霊は、空の星に届くほど背の高い者は出ていけと命令する。

それから唐突に(唐突、はこの物語の特徴でもあるが、They told you had been to her. の詩の場面が省略されて)、馬泥棒を引ったてよ、首をちょん切れと魔女霊がわめく。アリツイニヤは、牧童はついさつき馬に乗って帰っていったでしょと思ひださせようとするが、魔女霊は、黙れと怒鳴る、黙らないわよ!とアリツイニヤは怒鳴り返し、決定的な言葉を吐く。この場面のアリスの言葉は次のようである。

“Who cares for you?” said Alice (she had grown to her full size by this time.) “You’re nothing but a pack of cards!”

次に「アリツィニャ」版。

“What am I listening to you for?” Alitji demanded.

“Why—you’re all just a lot of leaves, anyway!”

そのとたん、ものみながコウモリに変わりアリツィニャめがけて飛びかかってくる。恐怖と腹立たしさにやたら腕を振り回しながら、アリツィニャは、そこで目を覚ました。ひらひら舞い落ちてくる葉を優しく払いのけてくれるお姉さんに、妹は不思議な夢を語る。

「アリス」ではこの後に妹の見た夢を姉も見えて、長じて大人になった妹が幼子たちに物語を語るさきの日々に思いを馳せる。「アリツィニャ」版ではそこはカットされている。

(4) 「アリス」から「アリツィニャ」へ

一八世紀末、流刑囚が涙にくれて船に揺られ運ばれていった彼方のオーストラリアには、五万年以上も石器時代の文化を継承してきた先住民がいた。将来性のある広大な土地を前にして流刑囚の涙も乾き、ここに英国の土地持ち紳士階級の暮しが夢でなくなった。牧場に開拓したい土地をうろつく邪魔っけな先住民は、白人の神であ

る銃によって殺された。赤子の首をひねるよりあつけない。そう、先住民はある意味では、赤子同然だったのである。白人を見たとき、先住民は先祖が戻ってきたのだと思った。死者はいつかこの世に戻ってくると信じられていた。星の彼方からの長い旅路に疲れ果て、血の気も失せて、真っ白になって。死者が飼育を始めた牛や馬や羊は、先祖からの自分たちへの贈物だと解釈し、勝手に捕らえて食べた。それがまた虐殺の原因となった。伝説はまことではなかった。アボリジナルも、戻ってきた白い人々は、先祖ではなくて、悪霊だったことを悟る。夢が覚めて、抵抗と争いと死と和解の試行錯誤を辿る歴史が続いていく。

そんないきさつを経た人々が、一九六七年を境にやっと一つの国民となった。他民族社会を機能させるのに、様々なアプローチが多方面から為されている。記者ナンシー・シュパードと画家ドナ・レズリーの共同作業は、若い読み手たちに、文学が示す道こそ、人間が人間と自然を理解するのにもっとも近道であることを示したのかもしれない。現代の老いた日本と違って、オーストラリアは言葉の威力がまだ残っている若い国なのである。

抄訳、意訳、改変、改悪などと、「アリツィニャ」のテクストを決めつけることは容易である。しかし決めつける前に、「アリス」の真髄である「言語の遊び」が

「アリツイニャ」にも生きていかどうか検証しなければならぬ。

言語の遊び、つまり言語による精神の解放は、ひとえに音声に、耳が捉える面白さにかかっている。しかし「アリツイニャ」はピッチャンチャチャラ語で書かれている。筆者はルールに従って一語ずつ読むことまではできるが、ピッチャンチャチャラ語の抑揚やリズムや音の流れを愉しむのは不可能である。従って音声を計算した魅力については棚上げせざるを得ない。

しかし「アリツイニャ」版は、アポリジナルの子どもたちの教育現場で、語りものとしてまず取り上げられた経験がある。歌と踊りが中心にあるアポリジナル文化の洗礼をそれなりに受けて初めて、書き下ろされた。「アリス」の収めた成功を分かち合っているとは言えないが、聞き手の満足感がある程度得た実績が、訳者に自信を与えただろうとは想像できる。

オリジナル音声の「翻訳」の困難は、翻訳作品総てに共通しているのではないだろうか。独語版であれ仏語版であれ声に出して読んで比較、判断するには、英語力と独語力、あるいは仏語力とがともに優れていなければならぬが、近縁の言語であっても、音声効果はひどく異なるはずだ。黙読して完璧な訳に思える何通りかの日本語版「アリス」でも、声に出して読んで笑える箇所は希

である。ピッチャンチャチャラ語をさらに学んでも「アリツイニャ」版の音声効果を判断する努力は、無駄かもしれない。原著を超える「アリス」は無いのである。

章を追う際に用いたのは、英訳された「アリツイニャ」である。「言語の遊び」の音声以外の要素、言葉の意味の無視や取り違えや連想、造語、艶語、しゃれなどは、英訳版をもとに判断できる。

アリツイニャが代表する人間界で通用する言葉の意味と、人間界の約束事を無視するものどもの道理の落差が掛合いになる部分は、そのままピッチャンチャチャラ語に訳されていることが、英訳版からわかる。それは章毎に見てきた通りである。パロディーは、きらきら星ならぬウォルツィング・マティルダの替え歌で、艶語は、Kangarutle の例で分かるように、健在だ。

訳者も編集者も、キャロルの真髄である「言語の遊び」心を汲み上げることに腐心した。その成果は七章のコアラ（眠りネズミ）の三人の少女の話によく表れている。

∴ "there were three little sisters, called Tili, Itji, and Itjia. All three lived in a tank."

"What did they live on?" Altji asked.

"Cooked food," said the Koala.

Much surprised, Altji said, "But how could they cook it?"

“On a fire, of course,” said the Koala. “Don’t forget they had Tili.”

「アリス」では、三人の少女の名前はリデル姉妹の名前のアナグラムである。ピッチャンチャチャラ風の三人の名前の中で、アナグラムは、Itilia、つまりアリツイだけである。イルツイは、エルシーのピッチャンチャチャラ語式の発音で、「砂漠」の意味もある。「アリス」のティリーに似た名前のティリは、「炎」あるいは「たいまつ」を意味する。タンクは、ピッチャンチャチャラ語ではタンカとなり、雨水を溜める容器である。

話の三人の少女たちは溜め水の中に住んでいた。ピッチャンチャチャラ部族などがいた大陸の中央部には、身体を休め病いを癒すのに、ウォーターホールに入る風習があった。「アリス」で、糖蜜の井戸を医学的な効果のある水が湧いている井戸に掛けているのと同じである。

アリツイニャは、水中に住んでいる少女たちが何を食べているのか、気になって質問する。するとコアラは、火を通した食べ物、と答える。水中で、どうやって煮炊きができるのと驚くアリツイニャに、コアラは思い出させる。だって、中にいる一人はティリル炎、なんだぞ、と。これは、抄訳と儀なくさせられる絵本という条件の中で、計算に基づくキャロルのノンセンス精神の深みを、理解し継承しようと訳者が努力した実例である。

小文で見てきたように、原著の登場人物や道具立てや舞台がヴィクトリア朝英国の社会現象であったり英国史に言及した箇所や英国の風土色が濃い箇所が、「アリツイニャ」版では大幅に改変されている。「アリス」を読み親しんでいる読者には、暴挙とみなされる危険性をはらむ作業である。そういう無謀な作業に訳者を駆り立てたものは何だろうか。訳者や挿絵画家が「アリス」の魅力に捕らわれたという段階が、第一にあるだろう。そして「アリス」とアボリジナル・ドリーミングの類似性も、訳者や挿絵画家にアボリジナルの子どもたちにこの物語を紹介したいという動機を与えただろう。

アリスは、夢を見た。アボリジナル文化の基調は、ドリームタイムの語りにある。ドリームタイムは、創世神話の時代である。夢の時代に虹蛇が山河を形作った。(人間は、動物が形作った大地から一步も出られないのに、自然を征服する夢を見ている。)夢の時代、人間は、自由自在に変身できた。アリスも(サイズだけだが)変身を体験するし、アリスが出会ったなかには、服を着て話をするウサギや魚や蛙がいれば、笑ったり消えたりできる猫もいるし、グリフォンやニセ海亀など想像上の生き物もいる。不可能が可能だった時代をもつアボリジナルの伝承と呼応するものが、キャロルの描く子どもの世界にはある。少女が出会う動物たちとその背景は、互い

に驚くほど相違している。けれども真の相違は、さほど大きくない。

抄訳であることから生じる物足りなさは、「アリス」の愛読者のものである。「アリツイニャ」を訳者の声で楽しんだ聞き手たちは、物足りなさや無縁だったろう。本抄訳の利点は、たびたびのまわりで語るのに手ごろな長さになったことである。

初等教科書のくだりは、日々それを使用している（聞き手の膝に開かれていたかもしれない）ために挿入されたのかもしれない。ここは語り手の声が聞こえてくるような場面である。六章から八章の馬や牧童が原因の不協和音は、理解に苦しむ。とりわけ牧童が服を着ているのが気になるのである。すんなりした裸の少女を見なれてきた読者の目には、服を着た大人の男はひどくいかがわしく映る。

これらの気がかりな点はあるものの、全体としてアボリジナルの大地、いままも原野が広く残るオーストラリアの土地を、単純な直線と曲線で表現した挿絵の助けも得て、力みなぎる大型絵本が生まれたと評価できる。ピッチャンチャチャラ語のテキストが、薄茶の柔らかな線で囲われ、英語のテキストはシンプルに印刷され、二言語併用の本のせこましさは無い。溜め水に浸かった三人の少女の楽天的な表情からもわかるように、光が溢れて

いる。英文のテキストは、オーストラリア風の改変は大胆に、言語の遊びは忠実に、を基本にしている。

例え何も替えられていなくても、「アリス」ほど奥行きのある本の場合は、受け取る側の脳が自分の精神を反映させて勝手に想像を行う。あるいは「アリス」のように自由な想像をさせてくれる本は、あまり多くないといえる。ピッチャンチャチャラ語に訳されるまでも、「アリス」は日本語も含めて四三の言語に翻訳され紹介された。「アリツイニャ」ほど自由気ままな翻訳はなかっただろう。「アリス」から「アリツイニャ」への変化は、ドラスティックな変化には違いない。しかし「アリス」が「アリツイニャ」までを旅した距離は、四四番目ではなく、長いほうから一番目ではないか。遠い旅をしたものである。

こう考えるのが妥当かもしれない。地理的、歴史的、時間的な長旅のうちに、「アリス」はいま、キャロルが想像もしなかった子どもたちの手に渡った。その「アリツイニャ」版は、「アリス」の普遍性のあるいは骨太の枠組を証明するために生まれた作品なのである、と。

使用した本

*THE COMPLETE ILLUSTRATED WORKS OF
LEWIS CARROLL*, Chancellor Press, London, 1982
ALITJI IN DREAMLAND, *ALITJINYA NGURA
TJUKURMANKUNTJALA*, Adapted and translated
by Nancy Sheppard, Illustrated by Donna Leslie,
Simon & Schuster, NSW, Australia, 1992
ALICE'S ADVENTURES UNDER GROUND by
Lewis Carroll, Pavilion Books Limited, London,
1985

参考及び引用をした本（出典は章対応）

「アリス」

*THE COMPLETE ILLUSTRATED
WORKS OF LEWIS CARROLL*,

Chancellor Press, London, 1982

「アリシィニヤ」

*ALITJI IN DREAMLAND, ALITJINYA
NGURA TJUKURMAN-
KUNTJALA* Adapted & translated

by Nancy Sheppard, Simon &
Schuster, NSW, Australia, 1992

「初版、訳者、画家をめぐって」〔4〕をなめる少女の名前

“Notes to Alitji” by Barbara Ker

Wilson, AID, 1992

（オーストラリア・アボリジナル諸部族の口頭伝承について左記を参照して頂きたい。）

『悪魔の犬エリンチャ』百々佑利子編訳、小沢良吉絵、

小峰書店、1986年

「第二の覚醒——アボリジナル口頭伝承の十七世紀」麒麟

麟創刊号、竹内佑利子、平成四年